

平成元年の空手チョップ（夢枕獏 著）

一般教科 長谷部一気

日本のプロレスを立ち上げ、昭和初期に大人気を博した力道山という人物を皆さんはご存知だろうか？かくいう私も、力道山のプロレスを生で見たことはないが、その当時、力道山の放送があると街頭テレビの前には人山ができるほど、その人気はすさまじかったらしい。さて、この力道山であるが、実は、ある酒場で暴漢に刺され、それがもともと40代の若さで亡くなってしまう。

しかし、この本は、実はその力道山が死んだのではなく、冷凍保存されていて蘇る！というお話である。それが、現代の格闘王といわれる前田明と、ガチンコ対決をするという流れになっている。プロレスはよく知られているように‘八百長’‘演劇’といわれている。ガチンコというのは、今の言葉で言えば、シュート、即ち真剣勝負のことを意味している。プロレスというのは、どこまでが本気なのか、アドリブはないのだろうか、とかいろいろグレーゾーンの大きい‘競技’である。簡単に、「プロレスなんて八百長でしょう！？」という人は多いが、そう言われているプロレスラー自身はどう感じているのか？プロレスラー自身としての、誇りと矛盾とは何であるのか、この本には余すところなく書かれている。さらに、往年のプロレスファンには涙ものの、決して実現しなかった「馬場 VS 猪木」も勝負が書かれている！ちなみに、この本に出てくるプロレスラーは全て実名であり、ここまでかいて問題にならないのか心配になってくるが、著者のプロレスに対する愛情によってクリアーされているのだろう。プロレスラーだけでなく、極真空手の総帥であった大山倍達や、柔道の木村政彦など、格闘技を語るに於いて外せない巨人が惜しむことなく登場する正に「何でもあり」の世界である。

さて、この力道山であるが、「空手チョップ」がその代名詞であり、日本中が大きい外国人レスラーに力道山がチョップを叩き込むと、日本中が大きな歓声に包まれていた。力道山の生きていた時代は昭和初期であり、当時、日本は敗戦の痛手から立ち直ろうとしており、そのアイドルが、力道山であり、美空ひばりであり、湯川秀樹であったのだ。蘇った力道山は、残念ながら、復活しても長く生きられない体になっており、試合などといった激しい運動をすると余計その時間は短くなってしまう、それでも、力道山は前田明の待つリングにたとうとする。そのときに力道山が言った言葉が感動的だ。「人間は単に長く生きるために命をもっているじゃないですぜ。ワタシは自分のことは分からないが、少なくとも力道山のことは分かる。力道山の夢のために生きているですぜ」。夢を持つことは楽しいことだけでない、寧ろ夢を持ったことによって、悲しいこと辛いことのことが多い、ともいえる。その悲しみを全て丸ごとひっくるめて受け止めてくれるのは、今、この力道山しかおりませんぜ、と宣言する。このとき、力道は自分の使命について分かり、覚悟している。

現在の日本では、幻想というものが殆どなくなっている。‘普通’の女の子が簡単にアイ

ドルになれるし、「できちゃった婚」ですぐ引退する。強烈なカリスマをもった俳優など殆ど存在せず、バラエティーにでるような、親しみやすい存在になっている。学校でも、学生に親しみやすい教師が求められ、恐い教師が殆どいなくなってしまっているように見える。それがよいと感じるか、悪いと感じるかは、人それぞれだろうが、少なくとも日本には、権威、幻想、夢が少なくなっているのは明らかだろう。この本は、幻想（妄想？）がテンコ盛りになっている凄い本である。現代の日本に生きる我々にとって、それぞれの「力道山」を持つことは、最も大事なことはではないだろうか。